

エッサ・デ・ケイロース著 『マイア家の人々』 (6)

— 第6章 —

尾 河 直 哉

Tradução japonesa dos *Maias de Eça de Queirós* (6)

NAOYA OGAWA

キーワード

19世紀ポルトガル文学 (literatura portuguesa do XIX século)、  
写実主義 (realismo) エッサ・デ・ケイロース (Eça de Queirós)、  
マイア家の人々 (Os Maias)

第六章

その朝、カルロスはエーガの家、かの名高きヴィラ・バルザックを不意に訪れた。この空想家ガリスボンに到着以来考えを温め続け、ついに実現した家である。

エーガが自宅にこの文学的な名前をつけた理由は、中心街からほど遠い、侘しい郊外のペーニャ・デ・フランサに家を借りた理由と

同じで、守護神バルザックの名前と田舎の静寂と澄んだ空気が、勉強や芸術と理想に捧げる時間にとって好都合に思えたからである。『ある原子の記憶』を仕上げるために蟄居するつもりなのだ！ただ、中心街からかなり距離があるため、コンパニアで四輪箱馬車をレンタルしなければならなかった。

カルロスにはヴィラ・バルザックがなかなか見つからなかった。それはエーガがラマリエーテで言っていたような、ラルゴ・ダ・グラサ<sup>③</sup>のちよつと先の奥まったところにある、木陰で微笑むシャレー風の爽やかな家などではなかった。まずクルス・ドス・クワトロ・カミーニョスを通り、次いで、丘に沿って畑のあいだを下る広い道を進むのだが、ここまでは四輪馬車で行くことができる。そこから塀に挟まれた狭い道の奥に、薄汚れた壁のあばら屋が現れる。石段を二段上ったところが門で、窓には眼がちかちかするほど真っ赤な

ブラインドがはめられていた。

しかしその朝、カルロスがどんなに必死で呼び鈴の紐を引いても、ノックカーを叩いても、庭の塀や樹冠越しにエーガの名前を叫んでも、返事はなかった。人里離れた田園のなか、ヴィラ・バルザックは森閑として静まり返っていた。もつとも、カルロスの耳には、戸を叩く直前にシャンパンを抜く音が聞こえたようにも思えたのだが。

この訪問のを知ると、家を空けて、カルロスにネールの塔<sup>4</sup>のような胡乱な印象を与えた召使いたちにエーガは腹を立てた。

「明日朝来てくれないか。もしも返事がなかったら梯子を使って窓から入って、家に火をつけてくれ。テユイルリー宮みたいに」

だが翌日カルロスが到着すると、ヴィラ・バルザックはすでに準備万端、客を迎える用意がすっかりできあがっていた。門では、悪癖がぞつとするほど顔に出た「お小姓」が突つ立っている。金属製のボタンがついた青いジャケットを着て、糊をばりばりに利かせた真つ白なネクタイを締めていた。高窓が開け放たれて、飾りカーテンの緑色のレップ織が顔をのぞかせ、田園の空気と冬の陽光をたっぷり呼吸している。赤絨毯が敷かれた狭い階段の上では、おそらく祖先の宮廷着かなにかだろう、十八世紀のダマスコ織のトンでもない部屋着を着込んだエーガが地面に額がくつきそうなるほど深々とお辞儀をしながら大声で言った。

「わが王子さま、哲学者の茅屋へようこそ！」

醜悪で陰気な緑色のレップ織の緞帳を大げさな身ぶりで持ち上げ、「王子」を部屋のなかに通したが、その部屋もまた全てが緑色だった。胡桃材の家具を覆うレップ織も緑なら、天上板も緑。縦縞の入った壁紙も、房べりをつけたテーブルクロスも、ソファアの上で傾いている円形の鏡の反射光も、すべてが緑。

そこには絵の一枚も、花の一輪も、本の一冊もなかった。バランスを取りながら地球の上に立っているナポレオン一世の像が花台の

上にあるだけ。英雄は、片手を背に回して隠し、もういっぽうの手をチョッキのなかに突っ込んだ、あの有名なポーズを取っている。その脇には金紙の帽子をかぶったシャンパンが一本、二脚の細長いグラスのあいだでふたりを待っていた。

「なんでここにナポレオンがいるんだ、ジョン？」

「侮辱をぶつける的<sup>まど</sup>だ」とエーガが言う。「こいつと暴君について語り合う訓練してる」

エーガは喜色満面で手をこすった。その朝、エーガは快活で熱気に溢れていた。すぐにでも寝室を見せたいと言うのだ。寝室を支配していたのは、真紅の地に枝葉模様をあしらったクレトン生地、ベッドがすべてを満たし、すべてを押し潰していた。まるでこれこそがヴィラ・バルザックの存在理由であり、中心目的のことである。そしてエーガの芸術的な想像力はまさにこのためにことごとく使い果たされていた。ベッドは木製で、ソファベッドのように低いけれども首支えは高く、へりに飾る掛け布にはレースが施されている。両側には毛羽立った真紅の豪華な敷物がかかれ、赤みがかつたインドシルクのゆつたりとしたカーテンが、幕屋のような豪華さでベッドを取り囲んでいる。そしてベッドの中の枕元には、売春宿のように鏡が輝いていた。

鏡はない方がいいと思う、とカルロスははじめに言った。エーガは黙ったまま愛しそうな眼差しでベッドをくまなく眺めると、舌先で唇をべろりと舐め、

「それなりの風情はあるんだがなあ……」と言った。

枕元の小テーブルの上には本が山積みになっていた。ボードレールのとなりにはスペンサーの『教育論』が、大デュマの『赤い館の騎士』の上にスチュアート・ミルの『論理学体系』が置かれている。整理ダンスの大理石の上には、ここにも二脚のグラスのあいだにシャンパンが置かれていた。やや雑然とした化粧台では、エーガの胸当てと白いネクタイのまんまに、白粉<sup>ポウダ</sup>のばかでない箱がでんと置

かれ、ヘアピン箱の横に巻き毛鍔が転がっている。

「エーガ、おまえ、どこで仕事するんだ？ 偉大なる芸術はどこで生み出す？」

「あそこだよ」と、エーガはベッドを指差しながら楽しそうに言った。

だがすぐに、勉強スペースを教えた。窓のそばの屏風で仕切られた片隅である。そこにあるものといえば円卓ひとつだけ。その上にエーガ特製の美しい便箋にまぎれて押韻辞典が置いてあり、カルロスは驚いた。

家の探訪は続いた。

壁を黄色く塗った、ほとんど飾りつけない食堂では、ガラスのはまった松材の食器戸棚に、新しい安物の瀬戸物食器が侘びしく収まっていた。窓の貫木には赤い服がかかっている。女物のガウンスのようだ。

「飾り気がなくて質素だろ」とエーガが声を上げた。「理想の堅い殻とフォークふたさし分の哲学を食って生きているオレにはぴったりの食堂だ。じゃ、次は台所……」

ドアを開けた。開いた窓から田園の爽やかな空気が流れ込み、庭の木々、空地の緑、そしてその向こうには、低くに、陽光に白く輝く家並みがのぞいている。そばかすだらけのたくましい女が膝に乗っていた猫を追い払うと、『ジュルナウ・デ・ノティーシアス』紙を手にしち上がった。エーガはふざけた調子で女を紹介した。

「こちらジョゼファ嬢。独身。多血症。ヴァイラ・バルザックの料理アーティスト。その手から垂れる印刷物をご覧になっておわかりのとおり、良き文学的素養の持ち主だ！」

娘は屈託なく笑った。おそらくこうしたバンカラな気風に慣れてるのだろう。

「ジョゼファ嬢、今日余は自宅で夕食を取らぬぞよ」エーガはふざけた調子で続けた。「ここにおわしますイケメンの青年が余のお

供をするによってな。ラマリエーテ侯爵にしてサンタ・オラーヴィア王子が、今日は、その友人の哲学者に夕食をおめぐみくださるのだ……で、余が帰宅するころには、ジョゼファ嬢はきつと穢れなき眠りを貪っているか、はたまた夜を徹しての放蕩に耽っているのであろうから、今ここで汝に命じておく。明日のわが『ランチ』には、見事な蝦蛄を二羽用意すべし」

それからすぐに声音を変え、分かったかという眼をして言った。「蝦蛄を二羽、こんがり焼いてくれ。もちろん、コールドミートにして……いつものように」

エーガはカルロスの腕を取ると、居間にもどった。

「正直なところを訊きたい。ヴァイラ・バルザックをどう思う？」

カルロスは「ユダヤ女」のエピソードのときと同じ言葉で答えた。「燃えるようじゃないか」

しかしカルロスは加えて、清潔だし、家の外観は良いし、クレトン生地も爽やかだと誉めた。もつともそれは若造が仕事部屋として使う独房としては、という意味だったが……

「おれはな」そのとんでもない部屋着のポケットに両手をつっこんで部屋を歩き回りながらエーガが言う。「おれはな、置物だの、骨董品だの、時代物の椅子だの、あの芸術家具つてものが我慢らないんだ……くそ。家具は、それを使う人の思想や感情と調和していかないおれが、なんで十六世紀のものに囲まれなきゃいけないわけ？ せつかく自分のうちの居間にいてだよ、フランソワ一世時代のご立派な会計士が選挙や相場の上昇について話しているところを眼の前で聞いているような、そんな気分になってもみろよ、これほど減入ることないだろ。鋼の甲冑着て、眉庇下ろして、胸の内に深い信仰を秘めてさ、それでトランプ台の前に座ってオンバーヤろうつてのとおんなじだ。時代時代で気質も違えば、ふさわしい態度も違う。十九世紀は民主主義を生み出した。そしてそれにふさわし

い態度がこれだ……」と言って、エーガは安楽椅子に身を投げ出すと、アームから細い脚を突き出した。「な、こんな態度はクラト修道院長<sup>5</sup>の時代のちっちゃな腰かけじゃ無理な話だな。さあ、シャンパン飲もう」

カルロスが不信の眼でボトルを眺めていると、エーガが言った。

「おいおい極上ものだぞ。エベルネの最高メゾンからの直送だ。ジャコブが手に入れてくれた」

「ジャコブって、どの？」

「ジャコブ・コアンのジャコブだよ」

栓の細紐を切ろうとして、エーガは突然思い出しに襲われ、ボトルを置き直すと、片眼鏡を眼窩にぐっと押し込んだ。

「そうだ！ このあいだ、ゴウヴァアリーニョの家ではどうだった？ 残念ながらおれは行けなかったが」

カルロスが夜会<sup>ソワレ</sup>のようすを語った。十人が二部屋に散らばって、吊りランプの下、眠くなりそうな小声で話してたよ。伯爵は、政治がどうだの、メサン・フリオ代議士は大演説家だ、あの人の言葉はさすがにすごいだの、教育改革がどうだのといつまでもぐだぐだ話していて、真底うんざりした。伯爵夫人はひどい風邪をひいていたんだけど、自分がイギリス人のくせして、イギリスについてセドフェイタ通り<sup>6</sup>みたいな意見を並べ立ててさ、ぞっとしたよ。イギリスってのは詩人も芸術家もないければ理想もない、金を貯めこむことしか考えたことのない国だって思い込んでいるんだから……つまるところ、ちっとも楽しくなかった。

「なんだそうだったのか！」エーガはひどくがっかりした声でつぶやいた。

栓をポンと抜いて静かにグラスを満たし、黙ったまま乾杯をして、ふたりはシャンパンを飲んだ。エーガにラケルを喜ばせてもらうためにジャコブが手に入れてやったシャンパンだった。

それから立ったまま敷物をじっと見つめ、新たに注いだグラスを

ゆっくり回して立った泡が消えるのを待つと、エーガは期待外れにがっかりした声でつぶやいた。

「そうだったか……」

そして、しばらくしてから言った。

「でも、ゴウヴァアリーニョ夫人のことは気に入ったと思ったんだが……」

夫人のことを聞いてから数日間はたしかに出来心もあったし、あの燃えるように真っ赤な髪にも惹かれていた、とカルロスは打ち明けた。

「でもあの人を知ってしまった今となっては、その出来心も消えたよ……」

エーガはグラスを手にしたまま座ると、高僧の履くような真紅のシルクの靴下をしばらくじっと見つめると、真顔でこんな言葉を吐いた。

「カルリーニョ、あれはいい女だぞ」

カルロスが肩をそびやかすとエーガはなおも言い張った。ゴウヴァアリーニョ夫人は知性があるし趣味が良い、それに斬新さも大胆さもあって、そのうえちつとばかりロマンチックだ。これがまたかなり刺激的で……

「それに女の身体としちゃあ、このバダジョーズあたりにはあれ以上のはいないよ！」

「セロリーコのメフィストフェレスよ、立ち去れ！」

するとエーガは面白がり、節をつけてこんな言葉を口ずさんだ。

Je suis Mephisto……

Je suis Mephisto……

しかし、カルロスは静かに紫煙を燻らせながらゴウヴァアリーニョの話の続け、サロンで二、三言ことばを交わしただけで急に飽きて

しまったのだと語った。しかも、こうしてにわかに偽りの欲望を感じ、少なくともしばらくのあいだは全身をわしづかみにされてすわ本物の愛かと思いきや、たちまち気持ちが悪えて、最後には「干からびて」しまうことなど、これが初めてではなかった。それはまるで石の上で燃える火薬のようだった。一瞬にして宇宙をも焼き尽くす激しい炎へと燃え上がっても、最後には石に黒い痕を残すだけ。おれは、安物の生地（アノモノノシマ）の粗い目から感情がむざむざ流れ出てゆくさまをなすすべもなく見過ごすことしかできない、軟弱で、力も縮まりもない心の持ち主なのだろうか？

「要するに干からびているんだよ！」とカルロスは微笑みながら言った。「おれは心がインポなんだ。悪魔みたいに…教会の神父たちによれば、愛せないことに悪魔はすごく苦しむらしい」

「大げさだよ！」とエーガが言った。

大げさだって？ 残酷な現実だ！ おれはこれまでの人生、しけたマツチのように音だけで火のつかない情熱を目の当たりにして生きてきたんだから。ウィーン（ウィーン）の軽騎兵大佐夫人のときだってそうだった！ 最初の逢引きに大佐夫人が来なかったときには、寝具を蹴っ飛ばして頭を枕に突っ込み、大粒の涙をほろほろ流したよ。そしてその後二週間後は、パプティスタをホテルの窓の前に立たせて、かわいそうな大佐夫人が角を曲がったとたんにおれと鉢合わせしないようにしてやったんだ！ オランダ人女性、マダム・ルーゲル（マダム・ルーゲル）のときはもつとひどかった。最初のころは馬鹿なことばかり考えてた。一生オランダに住んで、あの女と結婚しよう（あちらは離婚したばかりだったし）とかさ。ところがそのうちおれの首にぶらさがるあの女の腕——ああ、きれいな腕だった——が鉛みたいに重くなってきた…

「学者くずれよ、立ち去れ！ でもまだ文通は続いているんだらう？」エーガが大きな声でいった。

「それはまた別の話さ。ぼくたちは友人だから。純粋に知的な。」

マダム・ルーゲルはとても機知に富んだ女性なんだ。小説を書いたんだけど、これがまたプロートン嬢（プロートン嬢）の小説ばりの、洗練された内面分析らしい。タイトルは『しおれた薔薇』。ぼくは読んだことがないんだけどさ。オランダ語で書かれているから…」

「しおれた薔薇」… オランダ語かー！ エーガは頭を抱えて叫んだ。

「おまえは大したやつだ… だが、症例はさしてむずかしくないな。ドン・ファンと同じだ。ドン・ファンの場合も、炎と灰の繰り返しだった。あれも自分の理想の女、「自分の女」を求めていて、まるでそれが正義であるかのように、次から次へ他人さま女を渡り歩いていった。そしてアプレ・ザヴォワール・クシエ（アプレ・ザヴォワール・クシエ）、わたしは間違っていた、求めていた女はあなたじゃない、と告白する。そして相手に許しを請うて、身を引くわけさ。あいつはスペインでそれを千三回やったんだ。おまえもつまるどころ、あいつと同じ放蕩者だよ。残念だけど、最後には同じ地獄のような顛末になるぞー」

エーガはグラスのシャンパンを飲み干すと、大股で部屋を歩き回りながら言う。

「なあカルリーニョ、悪いことは言わない。『自分の女』をこちらから探しに行っても無駄だ。あちらからやってくるのを待て。だれにも『自分の女』はいる。そしていづれはその女と出会うことになる。おまえは今ここ、クルス・ドス・クワトロ・カミーニョス（クルス・ドス・クワトロ・カミーニョス）にいるよな。で、その女は今、北京にいるかもしれない。でも、おまえがこのレップ生地（レップ生地）の靴のエナメルをすり減らし、女があつちの孔子廟（孔子廟）で祈りを捧げているあいだにも、おまえたちふたりは、知らず知らずのうちに、宿命的に、抗いがたく近づいているんだよ、お互いにな… 今日はおれ、ちと喋りすぎた。おれたちの話、くだらなかつたな。服を着なくちゃ。でもおれがこの老骨に飾りつけをしているあいだ、おまえは悪魔に投げつける言葉を考えててもかまわないぞー！」

カルロスは緑の部屋から出ずに、煙草を最後まで吸った。その一方でエーガは鼻にかかったひどく調子外れな声でグノーの『舟歌』を歌いながらしばらく抽斗をどたんばたん開け閉めしていたが、やがて白いネクタイを締め、上着をひっかけ、外套を羽織って現れた。シャンパンで眼の周りが赤い。

ふたりは下に降りた。外に待たせておいたカルロスの箱馬車の横では、お小姓が直立している。金ボタンのついた青い制服。繻子のように輝く鮮やかな色彩の、二頭の馬を隔てる仕切棒。銀の馬具。ラペルホールに花を挿した金髪の御者の、堂々とした姿。ヴィラ・バルザックの傍らですべてがリッチな雰囲気醸している。エーガは嬉しかった。

「心地よき人生なり！」とエーガは言った。

箱馬車は出発した。ダ・グラサ広場に入ろうとしたときだった。かなりの速歩で走る無蓋のレンタル馬車とすれ違った。中にはカン帽のようなものをかぶった男が、新聞を大きく広げている。

「クラフトだ！」馬車のドアに身を乗り出しながらエーガが叫んだ。

箱馬車は止まった。エーガは跳び下りると走りながら大声で相手を呼んだ。

「クラフト！ クラフト！」

しばらくすると二人の声が聞こえてきたので、今度はカルロスが箱馬車から降りた。眼の前には、金髪で、赤みを帯びて溼潤とした肌の、クールな外見をした背の低い男が立っている。上品なフットコートの下にはアスリートのようなくまじしい筋肉が感じられる。

「こちらカルロス。こちらクラフト」エーガは大きな声で言い、古典的な簡潔さで両者を紹介した。

ふたりは微笑みながら握手を交わした。するとエーガは、三人でヴィラ・バルザックに戻ってもう一本シャンパンを開けよう、「奇

遇」を祝おうじゃないかと言いつ張った。クラフトは、昨日ポルトから到着したばかりで、こうして名高いエーガとも抱擁も済ませたわけだし、これからの時間を使ってちよつと遠くのペーニャ・ダ・フランサまで足を伸ばし、あの地区に暮らしているドイツ人のシエルゲン爺さんに会いに行こうと思っているからと、穏やかに落ち着いて申し出を断った。

「じゃあ、これでどうだ」とエーガは叫ぶ。「三人で話したいし、ふたりにはお互いをもっとよく知ってほしいから、明日ホテル・セントラルにディナーに来てくれないか。な？ よし決まった。じゃ、六時に」

箱馬車はふたたび走り出した。エーガは堰を切ったようにいつものクラフト賛美を始めた。今日の喜びの仕上げに、こうして素晴らしい出会いがあったことに感動しているのである。クラフトがいつも折り目正しいジェントルマンの雰囲気崩さないことを、エーガは絶賛していた。ピリヤードの試合のときも、戦場に入るときも、女性に挑みかかるときも、パタゴニアに行くことになっても、きつとあして崩さないのだろう…

「あの人はリスボンでも第一級品だ。おまえもぞつこん惚れこむぞ… それにオリヴァイスのあの人の家ときたら。あの見事な骨董品！」

とつぜん言葉を淀ませると、眉根にしわを寄せて不安そうな眼差しになった。

「でもいったいなんでヴィラ・バルザックのことを知ってたんだろう？」

「秘密にしないからじゃないか？」

「してないが… でも広告には載せてないぞ！ しかもクラフトは昨日リスボンに着いたばかりだ。おれの知人にはだれにも会っていないはずだ… 不思議だ！」

「リスボンじゃ、なんでも知れ渡るからな…」  
 「ろくな町じゃない！」エーガは呟いた。

セントラルでのディナーは延期になった。エーガは、いささか規模を大きくして、今度はこれをコアンへのお礼の宴会にしたいというのだ。

「あそこじゃ、ずいぶん夕食をごちそうになつてゐるからな」とエーガはカルロスに言った。「毎晩通つて…あの歓待には報いなくっちゃ…セントラルのディナーがちょうどいいだろう。心証が悪くならないように、コアンの隣には侯爵と低能野郎のステインプロケンをぶちこんでおこう。コアンはあいつの類の人間がお気に入りだからな…」

ところがこの計画も修正を被った。侯爵はグレガン<sup>①</sup>に行つてしまつたし、ステインプロケンは内臓の調子が芳しくなかつたからである。エーガはクルジェスとタヴェイラも考えてはみた。だが、クルジェスのぼさぼさの頭を思い出して不安になつた。それに例の憂鬱の発作が起つたらディナーはめちやくちやだ。結局コアンの親しい友人をふたり呼ぶことにした。ただそうなると、タヴェイラは呼べない。「ふとつちよローラ」の家で交わした言葉が原因で、ふたりの紳士のうちのひとりと険悪になつていたからである。

招待客が決まり、ディナーを月曜日に設定すると、エーガはホテル・セントラルの支配人と打ち合わせを行つた。エーガは支配人に、テーブルにはたくさんの花とパイナップルをふたつ飾つて欲しい、それからコアン風と名づけたなにかをぜひお願いしたい、自分としてはトマト・ファルシ・コアン風<sup>②</sup>というのが良いと思うのだが、いかがだろうか…と言つた。

その晩の六時、アレクリン通りをホテル・セントラルの方面へと歩いてみると、カルロスはアブラハム爺さんの骨董店にクラフトがいることに気づいた。

中に入ると、ラートを詐称するファイアンス陶器<sup>③</sup>をクラフトに見せていたユダヤ人の爺さんは、房飾りのついた縁なし帽を急いで取り、胸のところを両手を組んだままカルロスのまえで深々と腰を折つた。

それから英語混じりの奇妙な言葉で、これはこれは、ビユーティフルなジェントルマンのカルロス・ダ・マイアさま、とつておきの珍品がごぞいますよつてぜひぜひお確かめになつていただければ、なにそのジェネラスなお顔をちよつと回していただくだけで、珍品はあそこの隅の、椅子の上にごぞいますから、と言う。それはスベインの肖像画だつた。大胆な筆致で第一印象を写し取つていて、萎れた薔薇の色を大胆に使つた背景のまえに、年老いた街娼の痘痕顔が描かれている。どうにでもしていいわよと言わんばかりの獣じみた微笑からは、不品行がにじみ出ていた。

カルロスは澄ました顔で十トスタンでどうだと言つた。クラフトはこの浪費に度肝を抜かれたが、人の善いアブラハムは、灰色がかつた髭のあいだの、歯が一本しかない大きな口を開けて笑つた。「裕福な旦那方の悪い冗談」を満喫しているといった風情だ。十トスタンなんて、ご冗談を！もしこれで下の方にフォルトゥニー<sup>④</sup>のサインでも入つていたら、十コントス・デ・レイスはしますですよ。なるほどその幸運なサインは入つておりませんが…それでも二十ミルレイスはする代物でして…

「冷酷なるユダヤ人よ、絞首刑十回分だな」とカルロスは声を上げた。

ふたりは店を出た。ペテン師は戸口のところで両手を胸の前で組み、店を出て行くやんごとなき客たちに、どうかお幸せにと、いくどもいくども繰り返して言つてゐる…

「あのアブラハムのところにはまともなものなんかひとつもありませんよ」とカルロスは言つた。

「いや、娘がおります」とクラフトが言う。

たしかにきれいだけど、私にはぞっとするほど下品に見えますが、とカルロスが言った。アブラハムの話が出たついでに、オリヴァイスにはクラフトさんの見事なコレクションがあつて、普段から置物と芸術家具を軽蔑したふりをしているエーガが、とにかく素晴らしいと絶賛しております、と語った。

クラフトは肩をそびやかした。

「エーガ君はなにもわかっちゃいない。私が持っているのは、このリスボンでさえ、とてもコレクションとは呼べない代物ですよ。行き当たりばつたりに集めた古道具とでも言いますが… それにもう処分しようと思ってるんです！」

カルロスはびっくりした。エーガの言葉から、それが何年もかけ、愛情を注いでつくりあげたコレクションで、クラフトは誇りをもって生涯愛しむつもりだとばかり思い込んでいたからである：

クラフトは大した伝説だと笑った。実は、骨董に興味を持ち始めたのはつい一八七二年のことだとしてね。ちょうど南米から帰ってきたところで、あちこちで見つけたものを買ってきてはオリヴァイスの家にしまつておりました。当時、家は人に貸しておりましたが。ちよつと気まぐれを起こしまして。周囲にささやかな庭の広がるの廢屋が、四月の陽光を浴びて美しく見えたものだから。でも今じゃ、もし今持っているものを処分できるなら、今度は十八世紀の美術品を集めて、統一のとれたコンパクトなコレクションにしたいと思つております。

「このオリヴァイスで？」

「いや。ポルトの近郊にもつている別荘です。川のはとりの」

ふたりがホテル・セントラルの柱廊に入ろうとしていたちよつどそのときだった。コンパニーア社の箱馬車がアルセナウ通り方面から大速度で入ってきて正面玄関前に急停車した。

燕尾服を着て半ズボン穿いた、髪にすでに白いものの混じった輝くばかりの黒人が馬車のドアに駆け寄つた。真っ黒の髭をたくわ

えたとても痩せた男が馬車のなかから手を延ばし、シルクのように細い銀色の毛がもじやもじやした牝のスコッチテリアを黒人の腕に託すと、気取つて大儀そうに馬車を降り、金髪的女性に手を貸した。女性は帽子から下がったヴェールを顔にきつく巻いている。そのヴェールの黒さが、輝くような象牙色の肌をいつそう引き立てていた。クラフトとカルロスはさがつて道を開け、ふたりの眼前を女性が通り過ぎていった。女神のようにつんとすました姿ははつとするほど美しく、通り過ぎた後はまるでそこだけが明るくなったように、金色の髪の反射と香気が漂っている。女はジェノヴァ製の白い天鵝絨のコートを腕に掛け、列柱の下に敷かれた平石のうえで、そのショートブーツのエンメルがきらきらと輝いた。イギリス風のタータンチェックの服でめかし込んだ連れの若い男が、億劫そうに電報を開く。黒人は子犬を抱きかかえてふたりの後ろからついていった。静かになったところで、クラフトがつぶやいた。

「じつに粹だ！」

ボーイが案内する部屋に上がると、そこではふたりをエーガが待つていた。モロッコ革のソファに腰かけて、背の低い肥つた男と話している。男は田舎の新郎のように巻き毛にし、樁を胸に挿して空色の胸当てをしていたが、クラフトはどこかで見たことがあると思つた。エーガはカルロスをその男ターマソ・サウセデ氏に紹介すると、ベルモットを持って来させた。アブサンが良く似合う、文学的で悪魔的な洗練の時間になったと判断したからである。

光あふれる穏やかな冬の一日だった。窓が二枚、まだ開いていた。川面に、見渡す限りの空に、日が暮れようとしていた。風はそよよと吹かず、浄土のような平安のなか、空高くとどまつた雲が薔薇色に染まつている。向こう岸の遠景に広がる大地は、天鵝絨のよゆうな董色の霞に沈みはじめた。川は真新しい銅板のようになめらかに輝き、あちこちの広い停泊地では、大きな貨物船や船体の長い外国船、イギリスの装甲艦二隻などが、横着を決め込んで穏やか



な気候の愛撫に身を任せるかのように、マストも動かさず、眠るように停泊していた：

「わたしたちはさつき下で」ソファまで行って腰を下ろすとクラフトは言った。「すばらしいグリフォンの子犬を連れて、すばらしい黒人に傅かれた、すばらしい女性に出会いました！」

ダーマソ・サウセデはカルロスから眼を離さず、すぐに応じた。

「ああ、存じております。カストロ・ゴメス夫妻ですね。よく存じておりますよ。ボルドーと一緒にこちらへ参りましたから。パリにお住いの、とても粋な方です」

カルロスは首を回して男をまじまじと眺め、いかにも興味があるといったようすで愛想よく尋ねた。

「サウセデさんはボルドーからいらつしやったんですか？」

この言葉をも、まるで天恵でも受けたようにダーマソは喜び、すぐに立ち上がると、満面の笑みを浮かべてマイアに近づいた。

「二週間前、客船オリノコ号でこちらに参りました。パリから：あそこには行けるとときにはいつでも行っておりますから。あの方に会ったのはボルドーです。というか、正確には船上ですが。でもナントのホテルでもみなさんと一緒に一緒でした。粋な方々です。召使い。娘さんにはイギリス人家庭教師。小間使い。荷物など二十個以上ありまして。いやほんとうに粋な方ですよ！ 嘘みたいな話ですが、あの方々、ブラジル人なんです。でも奥さまにブラジル訛りはまったくありません。わたしらと同じように話します。ご主人の方はかなり訛りがあるんですけど。でもあの方も洗練されています。そうですか？ カルロスさん」

「ベルモットはいかがですか？」ボーイが盆を差し出して訊いた。

「じゃあ、食欲増進のためにひと口だけ。マイアさんはお飲みにならないんです。で、行けるときはわたくし、パリに行っているのものでして！ あそこには少なくとも人が住んでおりますからね。ここには豚しか住んでおりませんが。というわけで、わたし、毎年

あそこに行っていないと、病気になるそうです。いや、まじめな話。あそこの大通り、ね？。いやあ、わたしは好きですよ！ それに遊び方もよくわかっておりますから。なにね、あそこはわが家の裏庭みたいなものでして。おじもパリにおりますし」

「しかも物凄いいおじさんなんだよ！」エーガがこちらにやってきながら叫んだ。「ガンベッタの親友で、フランスの舵取りをしているんだ。ダーマソのおじさんときたら、なんと、フランスを操っているわけだ！」

ダーマソは爆笑しそうな嬉しきで顔を真っ赤にしている。

「ああ、それに影響まで与えております。ガンベッタの親友で、オレ、オマエの仲。一緒に暮らしてると言っても過言ではない。ガンベッタだけじゃありませんぞ。マクマオン、ロッシュユフォー、それからもうひとり、いまちよつと名前が出て参りませんが、ま、結局みな共和主義者！。みな気に入った人物です。カルロスさんはこのおじのことご存知ありませんか？ 白い髭を生やした男なんです。母方の従兄でして、ギマランイスと申します。ただ、パリではムッシュユー・ド・ギマランと呼ばれております。ちよつどこのとき硝子窓の入った戸が突然開いた。エーガが大声で「詩人に乾杯」と叫ぶ。

現れたのは。黒いフロックコートのボタンを上までしめたひじょうに背の高い人物だった。骨と皮ばかりの顔で、眼は落ちくぼみ、鷲鼻の下には白いものの混じったロマンチックな髭が長くこんもりと伸びている。額はほぼ禿げあがり、乾ききって縮れた巻き毛の房が、靈感を受けたように襟まで垂れさがっていた。どこか古臭く、作り物めいた陰気さが体じゅうから漂ってくる。

男は黙って指を二本ダーマソに差し出し、ゆっくりと腕を開いてクラフトを迎えると、間延びしてぐもつた声で言った。芝居がかった声だ。

「これはクラフトじゃないか！ いったいいつ着いた？ 気高き

御身を抱かせたまえ、高貴なるイギリス人よ！」

男はカルロスに眼も遣らない。エーガは前に進み出ると、男にカルロスを紹介した。

「もうご存知かどうか、こちらカルロス・ダ・マイア： トマス・デ・アレンカール、われらが詩人だ：」

かの有名な『暁の声』の詩人にして『エルヴィーラ』の命名家、『そして聖職受給者の秘密』の戯曲家。それがこの男なのだ！

エレンカールはもう一歩近づくと、黙って長い間カルロスの手を握っていたが、心を動かされたようすで、ただし声は相変わらずくもったまま、こう言った。

「社交界の掟に則って、失礼にならぬようカルロスさんと呼ばせていただきますが、カルロスさん、あなたが今手を握った人物がどれかおわかりにならないようすですな：」

カルロスは驚いて呟いた。

「お名前だけはよく存じておりますが：」

すると相手は落ちくぼんだ眼で、唇をふるわせながら言った。

「ペドロ・ダ・マイア君の無二の親友ですよ！ ペドロ君とは、

とっても親しい友人でした。かわいそうなことをしたが」

「なんとまあ、それじゃあ思う存分抱擁を交わしてください」とエーガは言った。「こんなときのお約束どおり、慟哭しながら：」

アレンカールはすでにカルロスを胸に抱きしめていた。そして腕をほどくと、ふたたび手を取り、愛しそくに、しかしいささか騒々しくその手を振った。

「堅苦しい『さん』づけはもうやめようや！ ぼくはあなたが生まれたところを見てるんだから！ よく抱っこしたもんだ！ おれのズボンを汚してくれたっけ！ さあ、もういちど抱きしめさせてくれ！」

クラフトはこの熱のこもった情景をクールに傍観し、ダーマソは心を動かされているようだった。エーガは詩人にベルモットを勧め

た。

「すばらしい出会いだなあ、アレンカール！ 神に感謝だ！ 気持ちを落ちつけるために飲んだらどうだ：」

アレンカールは一気に飲み干すと、カルロスに会ったのは実はこれが初めてではないことを友人たちに告白した。美しいイギリス馬に牽かれた四輪馬車に乗っているところをたびたび眼にしていたが、あえて声をかける気になれなかった。女性をのぞいて、自分の方から他人に声をかけることなど絶えてないからだ： ここでアレンカールはベルモットをもう一杯注ぐと、グラスを手にしたままカルロスの前に立ち、悲愴感あふれる調子で話し始めた。

「カルロスくん、君に初めて会ったのは『ポント・ダス・アルマス』<sup>15</sup>だった。ぼくはあのときロドリゲスの店で、今や見向きもされない古い文学を探し回っていた： 名前までよく覚えてるよ。あれは、わがロドリゲス・ロボ<sup>16</sup>の見事な詩集『牧歌』だった。あの生まれながらの詩人、いかにもポルトガル人らしいあの名歌人<sup>ポルトガル人</sup>だ。もちろん、いまじゃあすつかり片隅に追いやられているが。悪魔主義<sup>悪魔主義</sup>の自然主義だの卑劣漢主義だの、クソななに「主義」があれやこれや流行り出して以来な： と、そのときだった。君が横を通ったのは。ぼくにはそれがだれだかすぐにわかって、本が手からポトリと落ちた： ぼくはそこに一時間も立ち尽くしていたよ。嘘じゃない。考えたり、昔を思い出したりしながら一時間も：」

アレンカールはベルモットをごくごく呷った。エーガはいらいらしながら時計を見ている。部屋に入ってきた召使がガス灯をともし、薄暗がりからテーブルが浮き上がった。クリスタルと陶器が輝き、枝に咲いた椿が華やかだ。

ところが(強い光の下でいっそう老けて年寄りくさく見える)アレンカールは、生まれたカルロスくんを最初に見たのも、名前をつけたのもこのわたしで： などと長舌舌を揮いはじめた。

「なあ、ペドロくん」とアレンカールは続ける。「じつは、お父さ

んはきみにアフォンソという聖なる名前をつけたがっていた。アフォンソ・ダ・マイアという、あの男のなかの男の名前だ！ところがお母さんにも考えがあつて、どうしてもカルロスという名前にしたがった。というのも、じつは、わたしがきみのお母さんにある小説を貸したからだ。あのころはご婦人方にも小説を貸すことができた。小説にはまだ人を墮落させるような腐つたものがなかつたからね： あれはスチュワート朝最後の人物で美男の王子、わが国でカルロス・エドゥアルドと呼ばれるあのチャールズ・エドワードのことを書いた小説だった。この王子についてはみなさんもよくご存じだろう。レイ十四世時代にスコットランドで： まあいい！ つまるところ、きみのお母さんには文学の趣味があつた。しかも、言わせてもらえれば、最良の趣味だ。お母さんはわたしに意見を求めてきた。わたしはずっと文学指南をしていたからね。あのころは『ひとかどの人物』だったし。思い出すなあ：（ああ、忘れもしない二十七年前： いいかい？ 二十七年前だよ。おわかりですかみなさん、二十七年も前のことなんですよ！）で、まあ、お母さんは意見を求めてきた。で、わたしとしてはこう応じた。『奥さま、カルロス・エドゥアルドになさつたらいかげんかでしょうか。カルロス・エドゥアルド。詩集の扉にも、功名赫々たる英雄にも、ご婦人の口端にのぼるにもまさにびつたりの名前です！』以上、一字一句言つたとおりだ。」

ダーマソは相変わらずカルロスに心酔しているようすで、大声でブラヴォーを連発し、クラフトも指先で軽く拍手している。エーガは、時計を手に戸口をしきりに気にしながらそつげなくひと言「すばらしい」と言つたきり。

周囲の反応に喜色満面のアレンカールは、辺りに笑みを振りまき、ぼろぼろの歯を見せている。もう一度カルロスを抱きしめると、掌を胸にもつてゆき、大きな声で言つた。

「ええ、みなさん、この胸の内には陽の光が輝いております！」

ドアが開くとコアンが慌てて入ってきた。遅れたことをすぐに詫びた。エーガは飛んできて上着を脱ぐのを手伝うと、コアンをカルロスに紹介する。そこにいる面々のうち、カルロスだけがコアンの親しい友人ではなかつたからである。そして電気呼び鈴のボタンを押しながら言つた。

「コアンさん、残念ながら侯爵がいらつしやれないそうです。ステンブロケンのかわいそうに持病の痛風がぶりかえして。外交官、貴族、銀行家のかかる病氣ですからね： コアンさんも注意してくださいよ、なんだか痛風になりそうですから！」

両頬に真つ黒な髭をたくわえ、善良そうな眼をした上品な小男コアンは、手袋を脱ぎながら微笑み、イギリス人によれば貧者の痛風というのもあるそうですから、わたしのばあいは当然こちらに属するわけでした：と言つた。

コアンが話しているあいだエーガはその腕を取り、大事なもので置くようにテーブルの自分の右隣に着席させると、蕾の椿を一輪花束から抜き取つてコアンに差し出した。アレンカールも胸に花を挿している。ボーイが牡蠣の給仕を始めた。

まもなくしてモウラリアで起こつた事件が話題になつた。リスボンを震撼させた、ファド歌手による犯罪である。ひとりの若い女が同僚の女に腹を裂かれ、肌着のまま通りで死んだ。ふたりはナイフで互いに刺しちがえたのだという。路地は一面血の海だった。プセラ産のワインを試飲しながらコアンが微笑んで言つたように、それはさながら「豚の凝血料理」であつた。

ダーマソは得々として詳細を語つた。じつはわたくし、その刺した方の女を知つております。女がエルミディーニヤ伯爵の愛人だったところのことですが：美人かね？ 上玉です。手なんかまるで伯爵夫人のようで：それにファドの上手さといつたら、それはもう！ただ残念なのが、伯爵の愛人だった粹な時代からすでに大酒のみだったことでした：でも伯爵の名誉のために申し添えれば、

伯爵は最後まで女にたいする友情を失いませんでしたよ。絶えることなく女に敬意を抱き続け、結婚後も会いに行っていました。そして、もしフアドをやめる気があるなら、大聖堂の脇に菓子屋を開いてやるがどうか、と言っていたのです。でも女はそれを望みませんでした。バイロ・アウト<sup>(19)</sup>、居酒屋、女術、そんな生活が好きだったんですね……

ならず者同然のフアド歌手たちが住むあの世界は研究と小説のネタになりそうだとカルロスは思った。話はそこからゾラの『居酒屋』と写実主義の話に移ったが、アレンカールは髭についたスーブの滴を拭うとすぐに、こうして夕食の席に就いているのだから、「便所」文学の話は止めてくれないか、と懇願した。ここにいらっしゃる方々はみなさん、身ぎれいな社交界の人士ではありませんか？「糞」の話は慎みましよう！

哀れなアレンカール！絶大な権力と生命力で何千も版を重ねている自然主義の本。教会を、王権を、官僚制度を、国庫を、つまりはありとあらゆる聖なるものを屈服させ、階段教室に置かれた死体よろしく、そこに無礼な分析を加え、病巣を暴く礼儀知らずのその分析。人生の輪郭線や色彩や鼓動までも捕捉する、かくも精緻で、かくもしなやかなあの新しい文体。これらすべて（アレンカールは混乱した頭脳で、それらすべてをまとめて「新思潮」と呼んでいた）が突然その身に襲いかかり、何年にもわたり祭壇でミサを上げ続けてきたロマン主義の大聖堂を破壊して、哀れなアレンカールの途方に暮れさせ、年老いた悲しい文学者してしまったのだ。最初のころはアレンカールも抗った。満場のアカデミー会員を前に語った言葉借りれば「汚れた潮流の侵入を一滴たりとも許さない防波堤を築くために」無慈悲な論評をふたつ書いたが、だれにも読まれなかった。そのうち「汚れた潮流」はますます深く、ますます広くなってゆき、アレンカールは硬い岩場に足場を置くように「道徳」へと逃げ込んだ。猥褻の泥土にまみれた自然主義に、社会の慎みを

腐敗させる虞はないだろうか？よし、それならばこのわたしがモラルの勇士に、公序良俗の憲兵になってやろう。そこで、二十年にわたり小唄と頌歌を通じて首都の奥方全員に姦通を勧めた『曙の声』の詩人が——小説と戯曲で夫婦の義務を山のような退屈として描きだし、あらゆる夫に太った野獣の姿を、あらゆる愛人に古代アポロンの美と輝きと才能を与えることよって、不倫の恋の宣伝にあい努めてきた『エルヴィーラ』の作家が——（自伝『殉教の華』の記述を信じるならば）ビロードとキプロスワインに囲まれた暮らしのあいまに不倫と淫蕩と乱痴気騒ぎの凄まじい人生を自らも送ってきたこのトマス・アレンカールが、今や墮落ともきっぱり縁を切り、品行方正な慎みの管制塔となって、新聞、書籍、劇場を注意深く監視し始めたのである。そして、これまで以上に派手なキスの音が聞こえてきそうな兆しが、これまで以上に白いスカートの丈が短くなる兆しが写実主義のなかにちらりとでも見えたら、われらがアレンカール先生の登場。警戒の声を国中に響かせ、走っていつてペンを握る。その呪いの言葉は（なにごとにもたちまち満足するアカデミー会員に）かのイザヤの吠え声を思い出させるのだった。ところがある日、アレンカールはある事実気づいて、いやというほど叩きのめされた。自分がある本を不道徳だと告発すればするほど、その本が喜ばれ、売れてゆくことがわかったのである！全人類が下劣な存在に思われ、『エルヴィーラ』の作者はついに屈服した……

それ以来、アレンカールの怨念の言葉だけが残っている。吐き出すように語られた短いフレーズがこれ。

「おい、いいかみんな、『糞』の話だけはするなよ！」

しかしその晩は味方がいたおかげで、アレンカールは大いに喜んだ。自然主義も、ぶちまけるようにして本に描かれた物事や社会の醜い現実も認めなくなかった点ではクラフトも同じだったからである。芸術とは理想化だ！それなら、完成された人間の優れた見本

を、生きて物事を感じるのもっとも美しい形を、ぜひ見せて欲しい： エーガはうわあと言うと両手で頭をおさえた。いつぼうカルロスは、自然主義でいけば我慢ならないのが、あそこに立ち込める科学的雰囲気だと打ち明けた。科学を僭称しているけど、あれはよその哲学から引き出したものに過ぎないじゃないか。大工と洗濯女が寝る話をするのに、クロード・ベルナルや、経験主義、実証主義、スチュアート・ミルやダーウインを引き合いに出すんじゃない！

こうして両面から砲火を浴びて、エーガは弁護の熱弁を揮った。たしかに、写実主義の弱点は、筋書を発明し、ドラマを創造し、文学的想像力に身を任せるときにまだ十分科学的ではないことです！ 純粹な自然主義なら、類型、悪癖、情熱を、病気の症例を扱うように誇張も潤色もせずに描く、冷徹な研究論文の形を取るにちがいないわけですよ！

「そりゃ馬鹿げてるよ」とカルロスは言った。「性格は、行動のなかにしか表れないんだから！」

「それに芸術は」とクラフトが加えて言う。「形式のなかでしか生きられないわけですよ！」

アレンカールが割って入ると、大声で、そんな御大層な哲学なんかないと言った。

「みなさんはそんなして、骨折り損のくたびれもうけをなさっている。鼻をつまむ。写実主義をけなすにはこれで十分だ。わたしは写実主義の本を眼にしたら、すぐさまオーデコロンを浴びますな。」

「『糞』の話は止めましょう！」

「ノルマンディーの舌平目はいかがでございますか？」ボーイが皿を前に置きながら言った。

エーガはアレンカールをこてんぱんに論破したかったが、コアンがこの文学論争に超然としていて、退屈そうな笑みを浮かべていたので口をつぐみ、話を全面的にコアンに振ることにした。そしてこ

のサンテミリオンはどうかと訊いてみた。ノルマンディーの舌平目がたっぷりと盛られたところを見計らって、いかにも興味津々といった風情でこう尋ねた。

「ところでコアン、ほくらに教えてくれないか： 国債は発行すべきか、せざるべきか？」

エーガはこの国債問題がいかに重大か端から端までの面々に語りかけて、みんなの関心を煽り立てた。これは大変な問題ですよ。まさに歴史的な出来事になるはずですよ！

コアンは塩をひとつまみ皿のへりにのせると、いかにもこの道の大家といった風情で、国債は「ぜったいに」発行しなければなりません、と答えた。ポルトガルの国債は、今や、税収のように必要不可欠できわめて安定しており、しかも公然たる財源のひとつであります。大臣たちの唯一の仕事がまさに『税を徴収すること』と『国債を発行すること』でありました。これからもそうあるべきですよ！

カルロスは財政のことはわからなかった。しかし、これでは国は破産への道をひた走っているのと同じではないか。

「まちがいはなく真つ直ぐにひた走っております」と微笑みながらコアンは言った。「この点について幻想を抱いている者はおりませんよ。財務省の大臣でさえね！… 破産は避けられない。『一たす一は二』のように間違いありません！」

エーガが興味をもったようだった。なかなかおもしろそうじゃないか！ みんなもコアンの話を聞き逃すまいとしている。エーガはふたたびグラスを満たすと、言葉を貪ろうと身を乗り出してテーブルに肘をついた。

「破産は間違いない」とコアンは続けた。「宿命のように決まっております。だれでも、ここ二、三年のうちにやすやすと国を倒産させることができます！」

エーガは「そのやり方」を教えてくださいとしきりにせがんだ。なに簡単なことです、とコアンは言う。革命の騒乱を保っておく。国債

発行の前日に、二百人ばかり肝の据わった奴らを町に放って警官を襲撃させ、「共和国万歳！」と叫んで街灯を叩き壊させる。そのことをぶつとい字で書いた手紙をパリとロンドンとリオデジャネイロの新聞社に送る。金融市場をびびらせ、ブラジル人をびびらせる。たったこれだけでボン、もう破産です。ただし、だれのためにもなりません。

するとエーガが激しく抗議した。だれのためにもならないとおっしゃいますか？ まさか！ みんなのためになりますよ！ 破産の後には革命が起きます。間違いなく。『国債』を買った国民は、金が支払われなくなるから棍棒に飛びつきます。主義主張にしたがって、あるいはたんなる復讐心から、まずは「借金を踏み倒そうとしている」君主制を、ついでに卑劣な立憲主義者どもを一掃する。危機が過ぎると、ポルトガルは古い借金からも解放され、古い人間、つまりあの低能どものグロテスクな群れですな、それから自由になるわけです：

エーガの声には蛇のようなシユエーという音が混じっていた：しかし、銀行のおかげで成功した体制側の人間が「低能」だの「グロテスク」だの言われているのを聞くといたたまれず、コアンは友人の腕を取って、まあ落ち着きなさいと諫めた。四十六年<sup>20</sup>以来重要な役割を演じている者のなかにはたしかに冴えない莫迦もいるが、有能な者もいる。こんな指摘したのは、当然コアンが初めてだった。

「才能のある者、知識のある者もおります」とコアンは識者然とした口調で言った。「そのことは認めねばなりませんよ、エーガくん：あなたはいささか言い過ぎすぎだ！ いやほんとに。才能のある者、知識のある者はおるんですよ」

この「低能」のなかにコアンの友人たちが混じっていることを思い出して、エーガはその才能と知識を認めた。しかし、アレンカールは暗い面持ちで口髭を撫でている。少し前からラディカルな理想主義に傾き、一八四八年の人道主義的民主主義を支持していた。文

学ロマン主義の失墜を眼前にして、今度は本能的に、お隣の政治的ロマン主義に逃げ込んだのである。アレンカールは天才の統べる共和国、人民にたいする友愛が続べる共和国、つまりはヨーロッパ合衆国を望んでいた：しかも、かつてこそ文筆仲間、カフェ仲間、賭博仲間だったが、現在は権力の中枢にいるあの陣笠政治家どもに、久しく不満を抱いていた：

「あいつらに才能や知識があるなんて」とアレンカールは言った。「そりゃ戯言でしょ。コアンさん、わたしはあいつらを良く知っておりますが：」

コアンはこれを受けて言った。

「いやいや、アレンカールさん。アレンカールさんがあの人たちのお仲間だとしたら、あなたにも同じことを言うつもりはございません。ちよつと言い過ぎましたな。いや、それにしても才能のある人、知識のある人はおりますよ」

国立銀行の立派な重役であり、神聖なるラケルの夫であり、フェレジャウ通りの家で、あのすばらしいデイナーを御馳走してくれるコアンがこうして自慢をしているのだからと、アレンカールは悔しさを抑えて、才能と知識がある者もいることにした。

こうして銀行、妻の美しい眼、料理人の腕の良さを楯に、この反抗思想の持ち主たちに向かつて、国会に敬意を抱き秩序を尊重する気持ちと呼び覚まそうとしたのち、コアンは、この国には改革が必要なることを、これいじょうなく甘い声で敢えて言った：

しかし、この日はやたらと食い下がるエーガが、さらにひとつ蜜行を加えた。

「ポルトガルに改革は要りませんよ、コアン。ポルトガルに必要なのは、スペインの侵攻です」

昔かたぎの愛国主義者のアレンカールは、これを聞いて腹を立てたが、コアンはいかにも身分の高い人間らしく、白い歯のこぼれる余裕の笑みを浮かべて、それは「エーガ君お得意の逆説」に過ぎな

いと言う。ところが当のエーガはいたってまじめだった。そして相手を説得しようという気満々でこう言った。もちろん、侵攻といたるところで、わが国の独立が全面的に失われるわけではありませんが。そんなばかげた心配をするのは、十二月一日<sup>②</sup>クラブのやつらだけだ。そもそも六百万人の人口が、たかだか人口千五百万人の国に一息で呑み込まれる例など見たことありません。それに、美しき海岸の国ポルトガルが、陸軍と海軍の国スペインの掌中に陥ると知りながらみすみす指をくわえて見ている者がいるはずもない。植民地と引き換えに得られるはずの同盟については言うまでもありません。もっともその植民地にしたって、われわれにしてみれば、没落家族の親が相続人に遺した銀器のようなもので、いよいよとなつたときの質草くらいにしかならないわけで……つまり危険などにひとなつたのです。一方、ヨーロッパに戦争が起きてわが国が侵攻にあつたらどうなるか。めつた打ちに会い、巨額の賠償金を払わされ、州のひとつやふたつは失うことになるでしょう。ガリシアはたぶんドウロ川まで広がるんじゃないか……

「若鶏のキノコ添えでございます」大皿を見せながら、ボーイが低い声で言った。

ボーイが給仕をしているあいだに、あちこちからエーガへ質問が飛んでくる。セレリーコ・ド・バスト、つまり英雄たちの揺籃の地、エーガの揺籃の地たる、かの気高きセレリーコをスペインの村にしてしまうような混乱のなかで、国の救済はどこに求めるつもりなのか……

「公共精神が復活し、ポルトガルの国民性がふたたび覚醒するでしょう。ここに救済を求めます。踏みつけられ、侮辱され、卑しめられたわたしたちは生きる為**に**必死の努力をする。なんと素晴らしい状況に追い込まれることでしょうか！ 君主制もなければ、あのかそ政治家どもいない。国民にたいする恥ずかしい借金もない。すべてが消え去っているんですから。われわれは一度も使ったこと

のない新品のように、汚れないつるつるの状態に戻るはずですよ。そして別の新しいポルトガルの歴史が始まる。まじめで、知的で、強韌で、品位のあるポルトガル。勉強熱心で、思慮深く、かつてのように一文明を創造できるポルトガル……みなさん、ごつんと一発やつたくらいじゃ国民なんて再生しやしませんよ……おお！ 汝オウリケの神よ、われらにカステイリヤ人を送り込みたまえ！ そして汝コアンよ、われにサンテミリオンを与えたまえ！

騒然としたなかで今度は侵攻のことが議論になった。ああ、なんと美しい抵抗が組織されたことか！ コアンは、お金のことなら心配いらない、武器、大砲の類ならアメリカで買うことができるという言葉。だが、將軍は？ 借りてくれば済む話だ。たとえばマクマオンならそんなに高くないだろう……

「クラフトとほくでゲリラを組織するぞ」とエーガが叫んだ。

「なんなりとご命令を、將軍どの」

「アレンカールは」とエーガが続けて言った。「出かけて行って、抒情詩と頌歌で地方の愛国心を覚醒させるのが任務だ！」

すると詩人はグラスを置いて、たてがみを揺するライオンを真似ると言った。

「当方、すでに老骨だが、できるのは頌歌だけではありませんぞ。銃も持てるし、撃たせたらまだまだ狙いは正確。ガリシア人のひとりやふたりは倒せる……ただ、みなさん。こんなことを考えているだけで気分が滅入ってきてやりきれんのですわ。祖国の話をしながら、わしらが生まれた土地の話をしながら、冗談が言えますか？ たしかに大した国じゃない。それは認めましょう。でもいまいましいことにわたしが持っているたつたひとつの国だ。他に祖国がないんですから。わしらが暮らして、死んでゆくのはこしかな。くそ！ ほかの話をしましょう！ 女の話でも！」

アレンカールは愛国心で眼を潤ませながら、乱暴に皿をどけた……

続く沈黙のなかで、エルミディーニヤの愛人情報を披歴してからずつと黙ったままカルロスを信心深い眼で見つめていたダーマンが、良識と上品さを漂わせながら静かに言った。

「もし事がそこまで耐え難い状況に至りましたら、このわたくしといたしましては、パリに逃げます…」

エーガの勝利だった。嬉しくてエーガは思わず椅子から飛び上がった。ダーマンの唇から発された言葉、ここにこそすべてがある。ポルトガル人の自尊心の偽りのなき自然な叫びがこれなのだ。逃げる。こつそりと立ち去る…リスボン社会の上から下までみんなこうだ。上は国王から下は低能小役人まで、立憲主義者のやつらはみんなこうなのだ…

「みなさん、前線にスペイン兵がひとりでも現れたら、ポルトガル人は脱兎のごとく大挙して逃げるでしょう！歴史始まって以来の敗走が見られますよ！」

憤慨してアレンカールが叫んだ。

「裏切り者は死ぬ！」

コアンが口をはさんで、ポルトガルの兵隊はトルコ兵くらい剛勇だ、規律はゆるいけれど勇氣はあると言う。カルロスさえ、まじめくさつてこう言った。

「いやみなさん…逃げる者などおりません。死ぬ覚悟です」

エーガは真っ赤になった。なぜみんな英雄じみたポーズを取ろうとするのか？ということは、だれも知らないのだろうか？バイシャ地区の狭苦しい中庭で育ち、シラミだらけの高校で教育を受け、梅毒に蝕まれ、黴が生えた事務所で腐りかけ、新鮮な空気が吸えるとしても日曜に埃っぽいパッセイオ<sup>23</sup>に出かけるときくらいしかないこの民族が、立憲制五十年のあとで、筋力も気骨も失い、ヨーロッパでいちばんひ弱で、いちばん臆病な民族になりはてしてしまったことを…

「そりゃリスボン人だけのことだ」

「リスボンはポルトガルです」とエーガが言った。「リスボンの外にはなにもありません。ポルトガル全土はアルカードとサン・ベント<sup>24</sup>のあいだに存在するわけですから」

「ヨーロッパ一惨めな民族ですよ！」とエーガは続けて大声で言った。「しかもなんたる軍隊か！二日も行軍すれば、連隊はごそつと病院に入るでしょう！身分制議會<sup>コルテス</sup>が始まるちょうどその日のことでした。ひとりのスウエーデン人水夫、これがまた北欧のごつつい若者でしたが、そいつが、まるまる一個中隊を敗走させたんです。それを目の当りにしたのがこの国の軍隊です。下士官たちは文字通り逃げ去りました。弾薬帯を腰でがちゃがちゃいわせながら。そして恐怖心に駆られた将校は階段の裏に隠れてゲイゲイやり始めた！…

全員が抗議の声を上げた。——そんなことはいくらなんでも！

——でも、じつさい眼にした人がいるんだから——そりゃ妄想の眼で見たんでしょう…

「母の健康にかけて誓います！」と怒ったエーガは叫んだ。

だがエーガは黙ってしまった。コアンがエーガの腕にふれて、話しかけようとする。

コアンが言いたいのはおよそこんなことだった。未来のことはたしかに神さまだけにしかわからない。ただ、スペイン人が侵攻を考えていることだけはどうかやら間違いないらしい。スペインはキューバを失いそうだし、そうなった暁にはとりわけ侵攻が考えられるだろう。マドリードではみんながそう噂しているし、戦時備蓄の取引さえもう始まっている…

「あのスペイン野郎ども！ガリシア野郎ども！」アレンカールは暗い顔をして口髭を捻りながら唸った。

「マドリードのオテル・ド・パリで」とコアンは続けた。「ある行政官に会ったんですが、その方がもう決まったことのようにわたしに言うんですよ。まもなくしたらリスボンに腰を落ち着けることが



できるだろうって。海水浴でやってきたときにリスボンがとっても気に入ったらしいんです。わたしの見るところ、職を得るために領土拡張を望んでいるスペイン人もたくさんおられますしね！」

ここでエーガは恍惚となり、胸に手を押し当てた。ああ、なんと卓越した言葉だろうか！ ああ、なんと見事な観察だろうか！

「このコアンさんときたら！」エーガは両脇に向って叫んだ。「なんと繊細な観察をなさるんだ！ ほれほれするような言葉！ そうだろう？ クラフト。な？ カルロス。すてきじゃないか！」

だれもが慇懃にコアンの繊細さを口にしました。コアンはダイヤモンドが輝く手で両頬に生えた髭を撫でながら、眼を潤ませて礼を述べた。ちょうどこのとき、白いソースのかかったグリーンピースをボーイが皿に給仕しながら、低い声で言った。

「グリーンピース・コアン風でございます」

「コアン風」だって？ 各々、注意深くメニューを確かめる。間違いない。野菜のところだ。「グリーンピース・コアン風」と書いてある。ダーマソは大喜びで、これは「正真正銘の粋」だと宣言した。そして栓を抜いたばかりのシャンペンで、コアンの健康に初めて乾杯した。

破産も、侵攻も、祖国も忘れて、ダイナーは楽しく終わろうとしていた。その後も乾杯はいくどとなく交わされた。熱くにぎやかな乾杯だった。コアンは、諦めて子どもの気まぐれに付き合う大人のように余裕の微笑みを湛えて、革命と無政府主義に乾杯したが、その乾杯は、今や眼をらんらんと輝かせたエーガの発声によって複雑奇怪なものになっていた。食い散らかしたデザートがテーブルクロを一面に覆っている。アレンカールの皿では、噛みきれなかったパイナップルの食べ滓に煙草の吸殻が混じっている。ダーマソはカルロスに覆いかぶさるように体を傾けて、ペアのイギリス馬とその四輪馬車を褒め、あれはリスボンの街中を走るいちばん美しいものですとしきりに持ち上げている。民衆扇動家に乾杯をしたすぐあと

で、エーガはなぜかクラフトを攻撃し始め、イギリスに毒づき始めた。イギリス人は決して思考力のある国民じゃないと言ったり、イギリスにはやがて社会革命が起こり、国は血の海に沈むだろうと脅したりしている。対するクラフトは落ち着き払って胡桃を割りながら、首を振ってそれに応じていた。

ボーイがコーヒを給仕した。そしてテーブルについてからゆうに三時間以上経っていたので、全員立ち上がり、シャンパンで会話を活気づかせながら葉巻を最後まで吸った。天井が低く、ガス灯が五つも点いていれば十分に明るい食堂には、重苦しい熱気が立ち込め、もうもうたる煙草の白煙をとおしてシャルトルーズとリキエールの強い香気が広がってゆく。

息苦しくなったカルロスとクラフトは深呼吸をするためにヴェランダに出た。そして同じ趣味の人間どうし類友を呼ぶのか、仲良くなり始めたふたりは、アレクシン通りの骨董店とオリヴァイスにあるクラフトのコレクションについてふたたび話に花を咲かせ始めた。クラフトがコレクションの詳細を語り、希少価値があるのは十六世紀のオランダの甲冑だけで、あとはブロンズ像と陶器、見事な武器がいくつかあるだけだと言うのだった…

しかし、部屋にいる人たちから甲高い声が聞こえてきて、さては喧嘩でも始まったなと思ひ、ふたりは部屋に戻った。アレンカールがライオンの鬚のような乱れ髪を揺すりながら「哲学的な駄弁」に吠えかかるいっぽう、その横では、エーガがコニヤックのグラスを手にしたまま顔面蒼白で傲岸な冷静さを装いつつ、最近世に出ていゝ涎みみたいな抒情詩は軽犯罪警察にでも取り締まってもらえばいい、などと放言している…

「またおっぱじめましたよ」ダーマソはヴェランダの近くにやってきてカルロスに話しかけた。「今度はクラヴェイロのことです。

あのふたりと来たらまったくくだいたいしたもんですな！」

話題は現代詩人シマン・クラヴェイロとその詩『悪魔の死』の印

象だった。エーガが興奮気味にそのなかの詩節を朗読している。死を象徴する大骸骨が、まっ昼間、売春婦の服を着て、さらさらと音を立てて絹を引きずりながら大通りを通ってゆくというエピソードだ。

がりがりあばらの胸元を飾るは薔薇の「花束」か…

「新思潮」に侵された自然主義の太鼓持ちクラヴェイロを憎むアレンカールは、この詩節には文法の誤りが二か所、間違った詩句が一行、ボードレルから盗用したイメージがひとつあるぞ、と高笑いしながら得意げに指摘した。

いっぽう、コニヤックを立て続けに二杯呷ったエーガは、やたらと挑発的な個人攻撃を開始する。

「アレンカール、あなたがなんでそんな喋り方をするのか、おれにはわかってるんだ」とエーガは言う。「卑しい動機だよ。クラヴェイロが風刺詩であんたのことをこう歌ったからだ。

おお、アレンカールのアレンカール、  
春の炎に御身を焼いて…

みなさん、この詩は聞いたことないですか？」振り返って他の者たちを呼び寄せると、続けて言った。「完璧な詩だ。クラヴェイロのなかでも最良のものだな。カルロス、この詩、いちども聞いたことないのか？ 見事だぞ。この詩節なんかとくに。

アレンカールのアレンカール

「ケ・ケール」なにが欲しいんだ？

緑の牧場のまんなかで、

優しいヒナギク摘むじやなし、  
マルメンケールに問うじやなし…

アレンカールのアレンカール

「ケ・ケール」なにが欲しいんだ？

緑の牧場のまんなかで、

おまえが「ケール」欲しいのは

さだめし若い娘だろう！

この先は思い出せないけど、最後は良識の叫び声で終わる。これこそ、あらゆる安手の抒情性に対するほんとうの批判だ。

アレンカールのアレンカール

おまえが「ケール」欲しいのは

さだめし強い棍棒だろう！

アレンカールは蒼白の額に手を当てて、落ちくぼんだ眼で相手を見つめるとしわがれた声でゆっくりと言った。

「いいか、ジヨアン・ダ・エーガ、ひとつ言わせてもらう… 発育不全野郎とその礼賛者たちが作ったあの風刺詩、あの低能な揶揄だがな、ありや全部、便所の汚水のようにおれの足を流れてゆくだけだ… おれとしてはただズボンの裾をたくしあげればいい。ズボンの裾を… な、いいかエーガ、こうやってズボンの裾をたくしあげれば、それでいいんだよ！」

そして本当にズボンの裾をたくしあげた。ズボン下が覗いている。まるで突然気がふれたようだ。

「じゃあその汚水とやらを見つけたら」とエーガはアレンカールに叫んだ。「四つん這いになって飲みやいい！ あんたの抒情は血のめぐりが良くなって力が湧くぞ！」

だがアレンカールはその言葉に耳を貸さず、拳骨で宙を切りなが

ら他の人たちに向って大声でまくしたてた。

「仮にもそのくそつたれクラヴェイロが発達不全野郎じゃなかったら、わたしはこの下のシアード街あたりまで楽しく足で蹴り転がしていきますな。そいつ自身も、悪魔がうんざりするそのくそつたれへば詩もね！そして泥をたつぷりと塗りたくってから頭を踏ん潰す！」

「そんなふうには頭は踏み潰せませんよ」エーガは嘲るように冷たく言い放った。

アレンカールはエーガの方を向いて凄まじい形相をした。怒りとコニヤックで眼がぎらつき、全身が震えている。

「いや、踏ん潰す。踏ん潰してやる。いかジョアン・ダ・エーガ！こうやってな。こうやって踏ん潰してやるんだ！」そう言うのとアレンカールはとつぜん板張りの床をドンドン踏みつけ始めた。クリスタルグラスと陶磁器がぶつかりあつてちんちん音を立てている。「諸君、わたしだつてできればこんなことしたくない。だつてあいつの鉢めだまなかに糞とゲロとなんやらわけわからん緑のものがいっぱい詰めまつていて、踏ん潰したらそのどろどろの中身が飛び出してくるからな。町中を汚染して、そしたらわたしらみんなコレラだ。くそつ、わたしらみんなベストですよ！」

カルロスのアレンカールが興奮しているのを見て、腕を取ると落ち着かせにかかった。

「さあアレンカール！ばかな真似はそこまで…… 目くじら立てるようなことじゃありませんで……」

アレンカールは我に返ると、息を切らしながらフロックコートのボタンを外し、最後にもういちど心のうちを吐露した。

「たしかに、くそクラヴェイロとあいつの『新思潮』は腹を立てる筋合いのものじゃないな。あのいかさま師ときたら、妹の雌豚がマルコ・デ・カナヴェラス(27)の安娼婦だつてことを忘れてやがるがな！」

「よくも言いやがったな、この恥知らず」そう言うと、エーガは拳を握つて飛びかかろうとした。

びっくりしたコアンとダーマソはエーガを取り押さえる。カルロスは暴れるアレンカールを窓辺まで引きずっていった。アレンカールの眼はらんらんと輝き、ネクタイはだらしなく緩んでいる。椅子がひとつ倒れていた。モロッコ革のソファが置かれ、椿の咲いた枝が飾られた上品な部屋が、今では、煙草のもうもうたる煙に巻かれて、与太者たちがいさかいを起こした居酒屋のような趣を呈している。ダーマソがほとんど声を失い、真つ青な顔でおろおろ走り回っている。

「ああ！みなさん、よろしいですか、ここはホテル・セントラルですよ。ああどうしよう…… ここはホテル・セントラルですよ……」

そしてコアンに羽交い絞めにされながらエーガがしわがれ声で唸る。

「あの卑怯な恥知らず野郎…… 放してくれ、コアン！あんな野郎はぶつ叩いてやる…… ひどいこと言いやがって…… ドナ・アナ・カヴェイラは聖女だぞ…… あいつ絞め殺してやる……」

ところがそのあいだクラフトは一向に動じる気配もなく、次から次へとシャルトルーズのグラスを重ねていた。文学の敵同士が取っ組み合い、床を転げまわり、罵詈雑言を浴びせあう現場に、これまでいくとなく居合わせてきたからだ。アレンカールが使つたクラヴェイロの妹を揶揄するあの下劣な言葉など、ポルトガルにおける批評のいわば定型表現になつていく。クラフトにとつてそんなことなどどうでも良かったから、小馬鹿にした笑みを浮かべながら傍観していた。クラフトはそのうえ、まもなく和解になつて熱い抱擁が交わされることも知つていた。そして事実そのとおりになつた。アレンカールはカルロスの後ろについて窓辺から出てきて、フロックコートのボタンをはめ直し、後悔したようにすっかり神妙になつ

た。部屋の隅ではコアンがエーガに父親のよろしく厳しく諭すように話をしている。次いでコアンは振り返ると、手を挙げ、声を上げて、ここにいらつしやる方々はみなさん紳士だ、だから才能もあり高貴な魂をもつあなたがたおふたりがぜひ抱擁し合わなければならぬ、と言った。

「さあ、握手ですよ、エーガ。わたしのためにしてください。さあさアレンカール、どうかお願いだから！」

『エルヴィーラ』の著者が一步前に踏み出し、『ある原子の記憶』の著者が手を差し出した。しかし、最初の抱擁はぎこちなく浅かった。そこで物事にとらわれない寛大な心のアレンカールが、わたしとエーガのあいだには「一点の曇りも」あつてはなりません、と大声で言った。わたしはいささか度をこしておりました。すぐ頭に血が昇るこのいまましい性格のおかげで、人生これまで涙ばかり！ここに誓います。ドナ・アナ・クラヴェイラはまぎれもない聖女です。そしてクラヴェイロが豊かな才能に恵まれていることも、心の底から認めます……

アレンカールはグラスをシャンパンで満たすと、祭壇でするように、エーガの前でそれを高々と持ち上げた。

「ジョアンに乾杯！」

エーガもこだわりを捨てて応じる。

「トマースに！」

ふたりは抱擁を交わした。じつは昨日もドナ・ジオアナ・コウテイーニヨのお宅で言ったんですよ、わがエーガくんほど輝かしい者をわたしは知らないってね、いや本当に、とアレンカールが言えば、エーガがすぐさま応じて、われらのアレンカールほど抒情詩の才能を感じさせる詩人はいない、と断言する。ふたりは再度抱擁を交わし、背中を叩き合うと、お互いを「芸術の兄弟」だ、「天才」だと言ひ合った……

「やっとられんわ」クラフトは帽子を取るとカルロスに小声でさ

さやいた。「気が変になる。外の空気を吸わないと……」

夜会はだらだらと続き、十一時になった。みなまだコニヤックを飲んでいゝ。それからコアンがエーガを連れて帰った。ダーマソとアレンカールがカルロスと一緒に一階へ降りる。カルロスはアテロ経由で歩いて帰るつもりだった。

扉のところまで詩人がもつたいぶつて立ち止る。

「諸君」帽子を持ち上げて額にたっぷり外気をあてると大声で言った。「いかがだったかな？ わたしもなかなかのジェントルマンだったと思うが！」

カルロスは領いて、アレンカールの心の寛さを讃えた。

「そう言ってくれて嬉しいよ。きみはジェントルマンのなんたるかを知っているからな！ さて、そのアテロまで出発だ……だがそのまえに、煙草をひと箱買いにちよつとそこまで行かせてくれないか……」

「なんてやつだ！」遠ざかるアレンカールを見ながらダーマソが大声で言った。「この世が醜く見えそうになつたわ……」

言うが早い、今度はカルロスを褒めちぎりだした。マイアさんはご想像にもならなかつたでしょう。わたしがどんなにお目にかかりたいと思つていたか！

「そんな……」

「いやいや嘘ではございません……わたしはおべっかの言えないタチでして……なんならエーガくんにお聞きになつても良い。お宅がリスボンで最良の人物だと、わたしいくど言つたことか！」

カルロスは笑いを押し殺してなんども頭を下げた。ダーマソは心の底から同じ言葉を繰り返している。

「マイアさん、このわたしに嘘はございません！ 真心から出て来た言葉であること、どうか誤解なきよう！」

たしかに嘘ではなかつた。リスボンに住むようになってこのかた、カルロスは知らぬ間に、頬のふつくらとしたこの太つた若者か

ら深い沈黙の崇拜を受けていたのである。ダーマソにとっては、カルロスの靴のつやや手袋の色までもが尊敬の対象で、根本的な要素と同じくらい重要であった。カルロスを、ブルンメルやドルゼーやモルニーのように「外国でしかお目にかかれない」、本人の表現を借りれば目を瞠らせるような最高に粋な男、わが憧れの粋な男だと考えていた。この日の午後にはマイアとの会食があつて近づきになれことがわかると、ダーマソは鏡の前で二時間もつかえひっかえネクターを試したり、女性が腕につけるほどの香水をつけたりした。十時にホテル前に箱馬車を待たせておいたのも、御者の胸に花束を挿すよう言っておいたのも、他ならぬカルロスのためである。

「じゃあ、例のブラジル女性が住んでるのはここなんですかね？」二歩前に進み出ると、三階の灯りのついた窓を見上げながらカルロスが訊いた。

ダーマソはカルロスの視線を追った。

「奥方がおいでになるのは反対側です。あの人たちは一週間前からここにいらっしやいます。シックな方々ですよ。それに奥方の魅力的なこと。マイアさんもそう思いになりませんでしたか？わたしは船上で言い寄って。けっこう期待を持たせてくれました！ただ、リスボンに到着してからこのわたし、こつちで夕食あつちで夜会、アヴァンチュールがちらほらあつたりとなかなか忙しくて。ここに來ることができませんでした。短い手紙だけは送っておきました。でも、あの方の滞在がどうやら伸びるようなので、こちらとしても眼が離せません。たぶん明日にはここに参ります。もううずうずしていますよ。そしてもしふたりだけになれたら、はい、ごり押しでもなんでもキスします。わたしのばあい、カルロスさんがどうかわかりませんが、わたしのばあい、こゝと女性にかんずるかぎり、セオリーはこれ、イケイケです。わたしのばあい、とにかくイケイケ！」

そのときアレンカールが口に煙草をくわえて煙草屋から戻ってき

た。ダーマソは暇乞いをし、カルロスに聞こえよがしに、御者に大声でラ・モレッツリ嬢の住所を告げた。サン・カルロス劇場のセコンダドンナである。

「いいやつじゃないか、あのダーマソ。」カルロスの腕を取り、二人ならんでアテロを歩きながらアレンカールが言った。「コアン家の人たちとうまくやっているし、社交界でもモテモテのようだし、若いのに金持ちだ。金貸しの老シウヴァはあいつの親父だが、あんなの父親はずいぶん巻き上げられたっけな。わたしもやられた口だ。ただダーマソ自身はサウセデを名乗っている。母親の名前かもしれないし、ひよっとするとどっちあげかもしれない。いい若者だ。父親はペテン師だがな！今でもペドロの声が聞こえるようだ。あの大自然としたやんごとない話し方で、こう言つてたよ。『ユダヤ人シウヴァよ。金だ。しかもたくさん！』今は昔だな、カルロス。大人の時代だった！」

そこで、墓のように一列に並んで眠たげな光を投げるガス灯のもと、いつまでも続く暗く寂しいアテロの町を歩きながら、アレンカールは、自らもペドロも青春を送つたかの「大いなる時代」について語つた。そしてその感傷的な言葉の端々から立ち上る逝きし日の時代がかつた匂いを、カルロスは嗅ぎ取つた。それは若者たちに内乱の熱気がまだ消え残つていた時代だった。その熱気を冷ましたため、若者たちは群れをなして居酒屋を荒らしまわり、駄馬をくたくたになるまで駆つてシントラに二輪馬車を走らせていた。シントラは当時恋人たちの愛の巣で、そのロマンチックな木陰の下では貴族の奥方が詩人の腕に身を投げ出していたのである。女はみんなエルヴィーラ、男はみんなアントニー<sup>28</sup>だった。お金はたつぷりあつた。文学と雅の刷新運動が、ヨーロッパの美しき庭たるこの国を高めようとしていた。雄弁に燃え立つ学士たちがコインブラから続々とやってくる。国王の使節がピアノに合わせて歌う。同じ抒情の息吹が頌歌と法案を膨らませる……

「リスボンも今よりずっとおもしろかったんですね」とカルロスが言った。

「今とは全然違う時代だったよ、カルロス。みんな生き生きとしていた。こんな、なんでもかんでも科学科学という雰囲気はなかったし、退屈な哲学もなかった。あの実証主義者なんて青臭いやつらもいなかったしな……でも心意気だけはあったぞ！ 燃え立つような活気があった。政治にさへ……今のこの豚小屋ぶりを見てみる、あの恥知らずどもの群れを。あのころは議事堂にも入れたし、靈感も、迷る才気も感じることができた……頭のなかが輝いていたんだよ……それにいい女もそれこそ山のようにいたしな」

この失われた世界にたいする郷愁に、アレンカールの肩はがっくりと落ちていった。靈感を受けたライオンの鬣のような乱れ髪が古い帽子のつばの下からはみ出し、擦り切れた仕立ての悪いフロックコートが見るも無残な姿でわき腹にぶらさがって、その姿にはかつてない悲しみが滲んでいる。

ふたりはしばらく黙って歩いた。ジャンラス・ヴェルデス通りに入ると、アレンカールが一息つきたいと言い、ふたりは小さな居酒屋に入った。地下室の薄暗がり、石油ランプの黄色い斑点がくつきりと浮かび、カウンターの濡れたトタン板や棚の瓶、スカーフを顎の下で結んだ女主人の悲しげな顔を照らしている。アレンカールは店の常連らしかった。カンディタ嬢が歯痛だと知るとたちまち口マンチックな悲愴感を脱ぎ捨て、カウンターに肘をついて親しげにどう治療したら良いか助言を与え始めたからである。そしてカルロスが白ラム酒の代金を払おうとすると怒り、磨き上げたトタン板を二トスタン玉で叩きながら、度量の大きさを見せつけようと声を張りあげた。

「酒屋の飲み代を払うのはこのわたしだよ、カルロス！ 御殿ならだれか他のやつが払えばいいが……この居酒屋で払うのはこのわたしだ！」

居酒屋の戸口でアレンカールはカルロスの腕を取った。黙ったま

ま通りを何歩か行くとまた立ち止まり、はつきりしない声でもの思わしげにつぶやいた。夜の巨大な厳肅さが染みこんだような声だった。

「あのラケル・コアンは神々しいほど美しいな！ カルロス、きみはあの女を知ってるか？」

「見ただけです」

「聖書の女を思い出させないか？ ユデイトやデリラ<sup>(29)</sup>のような女傑じゃなくて……聖書の抒情詩に謳われる……熾天使のように神々しい女だよ！」

ラケルは当時、アレンカールのプラトニックな情熱の対象で、思ひ姫であり、ベアトリーチェだったのである……

「しばらくまえに『ダイアリー・ナシオナウ』紙でこんな句を見なかったかい？」

「春は来ぬ！ いざ身を寄すらめ、きみ」

かく薔薇に言いは、風

なかなか良いじゃないか！ ちょっといたずらっぽくて。まず、『春は来ぬ！ いざ身を寄すらめ、きみ』と言っておく……そしてすぐに『かく薔薇に言いは、風』と続ける。わかるかな？ この効果、なかなかのもんだろ。だが余計なことは考えちゃいけない。わたしがあのひとを口説こうとしてるんだとか……そもそもコアンの妻だ。友だちであり、兄弟のようにしているコアンのな……それにしてもあのひとは神だ。あの眼。まるで液状シルクのようないか、なあ……」

アレンカールは帽子を取って、その広い額を風にあてると、それまでとは違う声で、むりやり絞り出すように言った。

「あのエーガはたいした才能の持ち主だな……コアン家によく出入りしているようだ。ラケルもあの男を面白がっている……」

カルロスは立ち止った。ラマリエーテの前に来たのだ。修道院のようなその謹厳なファサードをアレンカールは一瞥した。光のなかで眠っているように見える。

「お宅、なかなか良い雰囲気じゃないか。それじゃあお入り。」

わたしはここから自分の巢穴に歩いてゆくから。いつでもお好きなときにいらっしやい。カルヴァーリヨ通り五十二番地の四階。持家だけど部屋は四階だ。最初は二階に住んでたんだが、だんだんと上に昇っていつてね。ま、わたしが上に昇れるのは建物の階だけが……」

自分の貧乏を皮肉るようにアレンカールは言った。

「いつかせひ夕食を食べにいらっしやい。宴会というわけにはいかなけれど、スープとローストチキンくらいなら。長年我が家で働いてくれていた黒人の、というか友人のマテウスは、いざとなればきちんとした料理もできる男だから！ わが懐かしのペドロくん、きみの父親だが、あれにもたくさん夕食を御馳走してやったよ……あのころ、わが家は楽しかった。食事や寝る場所から小遣いまで提供してやったんだ。今や飛脚を従えてコンパニニアで借りた箱馬車をあちこち走らせている、あのろくでなしどもにね……ところが今じゃああいつら、わたしと分かると顔をそむけやがる……」

「ただの思い過ごしですよ」とカルロスがなだめる。

「いや、そんなもんじゃない」と詩人は答えた。恨みのこもった深刻な表情をしている。「思い過ごしなんかじゃないんだよ、カルロスくん。きみはわたしの人生を知らないからそう言うんだ。これまででどれだけ攻撃にさらされてきたか。しかもいわれのないことで。嘘じゃない、どれもこれもいわれのないことばかりだ……」

アレンカールはカルロスの腕を取り、震える声で言った。

「大きな面してそこらへんを歩いているあの男たち、あいつらみんな一緒に酔っぱらった仲だよ。たくさん小遣いをくれてやった。たくさん夜食を食わせてやった……それが今じゃなんだ？ 大臣

だ、大使だ。大物だよ！ そいつらがきみに菓子折りのひとつも持ってきたことがあるか？ ないだろ？ わたしのところにもない。ひどい話だろ？ カルロス。これはあんまりだ。なにも伯爵にしてくれとか、大使にしてくれとか言っているんじゃない……ただどこかの会社のちよつとした椅子とか、そのくらいだ……あいつらにしてみればなんてことないはずなのに！ まあわたしとしても、まだパンや煙草を買う金に困っているわけじゃないんだが……とはいつても、こういう恩知らずをやられると、ほんと、髪の毛が白くなるよ……でもまあこんな話でうんざりさせてもなんだな。カルロスくん、きみには幸せになつてもらいたいし、神さまがきつとそうしてくださるよ！」

「ちよつと上がっていきませんか、アレンカールさん」

この寛大さに詩人はほろりときた。

「ありがとう」カルロスを抱擁しながらアレンカールは言った。「すぐくうれしいよ。真心から言ってくれてるのがわかるから……きみの家族はみんな真心がある……お父さんからしてそうだった。獅子のように鷹揚で大らかで！ これだけは心にとめておいてくれ。ここに居るのはほんとうの友人だ。巧言なんかじゃないぞ。心の底からそう思っているんだから……それじゃあここで。とこころで葉巻はどうだ？」

カルロスは、それが天からの贈り物でもあるかのように、迷わずに欲しいと言った。

「じゃあカルロス、これがその葉巻だ！」アレンカールは熱のこもった声で言った。

ラマリエーテの主であるこの金持ちに差し出した一本の葉巻から、アレンカールの思いは過去へと飛んだ。カフェ・マラーレで、悲しみのマンフレッド<sup>3</sup>のようにもつたいぶつて葉巻がめいっばい入った葉巻入れをしきりに周囲の人たちに勧めていたころのことだ。そのとき好きになったのがこの葉巻だった。アレンカール自身

が火をつけてやり、ちゃんと火がついているか確かめた。どうだ、なかなかいい葉巻だろ？ これはとびきりいい葉巻ですねとカルロスが言う。

「いい葉巻をあげたか！ そりゃよかった」

ふたりはもういちど抱擁を交わした。アレンカールが別れを告げるとき、鐘は一時を告げていた。心が軽くなり、以前よりも自らに満足したのだろう、ファドの一節を鼻歌で唸りながら去っていった。

カルロスは就寝前のひととき、長椅子に横になりながら、アレンカールのくれた最悪の葉巻の残りを吸い、バプティスタにお茶を淹れてもらいながら、この老いた抒情詩人の語る数奇な過去に思いを馳せた：

あの哀れなアレンカールはどんなに気持ちのいい人物だったか！ ペドロやアロイオス、当時の友人や恋を語るときに、マリア・モンフォルテの名前すら口にしないよう、どんなに注意を払ってくれたことか！ しかしアテロあたりを歩いているときだった、カルロスはあやうくこう口にしかけたことがあった。「アレンカールさん、母のことを話してくれませんか？ 母がイタリア人と逃げた話はすっかり知っているの！」

こんなことを思っている、カルロスは知らず知らずのうち、この嘆かわしい物語がコインブラで飲んだくれ、グロテスクといっても良いような形で明かされた晩のことを思い出した。祖父はペドロの遺言に沿って、まじめな恋物語として語って聞かせていた。情熱的な恋と結婚。両者の性格の不一致。短い結婚生活。その後、母親が娘と一緒にフランスに立ち去ったこと。そこでふたりとも亡くなったこと。だがそれ以上の話はなかった。父親の死はいったい、長い神経衰弱の果ての突然の結末としてしか語られてこなかった：

ところがエーガは自分のおじたちから聞いてすべてを知っていたのである： ある晩のこと、カルロスとエーガは一緒に夕食を取った。エーガはしたたか飲んで理想主義の発作に襲われ、女性の貞淑さなど人類の衰退の元凶でしかないという、ぞっとするような逆説を弄しはじめた。その証拠に、私生児はいつだって知的で、大胆で、輝かしいじゃないか！ おれは母親を、このおれの母親を誇らしく思っているぞ。なぜって暖炉の傍らでロザリオ繰ってお祈りを咄いているような清く正しいブルジョワ女じゃなくて、靈感を受けた女だからな。亡命者のために富も尊敬も名誉も人生も捨てたおまえの母親のように。カルロスは、この言葉を聞くと、穏やかな月明かりの下、橋のまんなかで凝然として立ち尽くした。しかし、エーガに問いただすことができなかった。それまでまくしたてるように喋っていたエーガが吐き気を催し、まもなくカルロスの手の中にゲロゲロやりはじめたからである。カルロスは、セイシヤスの自宅に引きずっていつて服を脱がせ、酔った勢いでべたべたくっついたキスしたりしてくるエーガに我慢しなければならなかった。やっとの思いで枕カバーにしがみつかせると、エーガは涎まみれでこう咄いた。「おれは私生児になりたい。かあちゃんが浮気女だったらどんなよかったか！」

そしてカルロスはその夜、それまで耳にしていた母親像とはこんなにも違う母親を知って、ほとんど一睡もできなかった。亡命者の腕に飛び込んでいったなんて。ひよっとしたらポーランド人かもしれない！ 翌日、朝早くエーガの部屋に入るとカルロスは、親友だったらお願いだ、すべてを洗いざらい話してくれないか、と頼んだ。

かわいそうに！ エーガは病気のようだった。頭に広げて載せたカンフル入りアンモニア水の布パッドのように真っ白い顔をして、言うべき言葉をなにと見つけられずにいる！ カルロスは一晩中議論するときのようにベッドのわきに腰かけるとエーガを落着



かせようとした。カルロスは傷ついているわけではなかった。知りたかったのだ！ 家族にまつわる途方もないエピソードをずっと知らされずにきたのだ。これが知らずにいられようか！ そこには口マンズがあるのか？ いったいどんな口マンズなんだ？

そこでエーガは元氣を取り戻し、おじのエーガから聞いた話をぼそぼそと話し始めた。マリアがある大公に情熱的な恋心を抱いて、ふたりに駆け落ちした。マリアについては何年も消息がわからなかった…と。

このすぐ後でヴァカンスになった。サンタ・オラーヴィアに帰るとすぐ、カルロスは祖父にエーガが酔ったこと、げつぷの合間にエーガからとんでもない秘密を打ち明けられたことを話した。かわいそうに、祖父は一瞬口がきけなくなった。そして、まるで胸の鼓動が弱くなってゆくかのように、か細く痛々しい声がかつと聞こえてきた。しかし、話は微に入り、細を穿っていて、泥だらけのペドロが真っ青になって父親の腕に飛び込み、苦しい、苦しいと無力な子どものように泣き崩れたことまで、あの耐え難い口マンズのすべてを語った。

祖父は加えて言った。オーストリアのウィーンで母親が死に、モンフォルテが連れ去った孫娘も死んだ、この孫娘を自分はいちどとして目にしていない、これがあの愛の結末だ。話は以上。かくしてわが家の恥辱は、ここサンタ・オラーヴィアの墓地と、遠い外国のふたつの墓に埋まっている…と。

カルロスはその午後のことをよく覚えていた。祖父と悲しい会話を交わしたあと、カルロスは一匹の雌馬に試めし乗りしなければならず、夕食のさい話題になったのは、「スルタンの愛妾」という名のその雌馬ばかりだった。そして実を言えば、その数日後には、母親のことなどきれいさっぱり忘れていたのである。この悲劇にたいしては、漠然とした、いわば文学的な興味だけしか抱くことができなかつた。悲劇が起こったのが優に二十年以上前。そのころの人た

ちも、もうほとんどいない。クサル・エル・ケビールで死んだ先祖だとか、国王の御寝所で寝た祖母だとか、一族の古い年代記に記されたそんな逸話と同じことだった。そんな話を聞いても涙も出なければ、顔も紅潮しない。なるほど、世にもまれで高貴な貞淑の花として自分の母親を自慢できたなら、それに越したことはなかつたかもしれない。だからといって、母親の過ちを生涯苦々しく思い続けられるかといえば、これもまたできない相談である。なぜなら、カルロス自身の名譽は、母親の心に芽生えたよこしまな偽りの衝動とはなんの関係もないのだから。母親は罪を犯し、そして死んだ。それだけだ。たしかに、この裏切りに絶望し、血の海で死んでいった父親の思いは残る。しかし、カルロスは父親がどんな人か覚えていなかった。父親を愛そうにも、カルロスが記憶に留めているものといえは、更衣室にかかっているあの精彩を欠いた下手くそな肖像画だけで、そこには、シャモア革の黄色い手袋をはめ、鞭を手にした、眼の大きな浅黒い肌の若者が描かれていた。母親となると銀板写真一枚、鉛筆書きのスケッチ一枚残っていない。金髪だったと祖父は言っていたが、それ以上のことはわからなかつた。母親の腕のなかで寝たこともなければ、母親の慈愛の温もりに包まれたことも絶えてなかつた。父親も母親も、カルロスにとってみれば便宜上崇める象徴に過ぎず、パパも、ママも、愛する人たちすべてが、たったひとりの人物、祖父なのであった。

バプティスタがお茶を持ってきた。アレンカールの葉巻も吸い終わろうとしている。夕食会の疲労に早くも身を任せ、カルロスはなかばうつらうつらしながらそのまま長椅子でぐったりしていた。閉じた瞼の裏側に少しづつひとつの光景が浮かび、色づき、やがて部屋いっぱいには広がっていった。河畔では、浄土のような平安のなか日が暮れてゆく。まだ明るさの残る、ホテル・セントラルの列柱廊が開く。白髪まじりの黒人が、牝のスコッチテリアを腕に抱いてやってくる。ひとりの女性が通り過ぎる。象牙色の肌をした

背の高い女だ。ジェノヴァ製の白い天鵝絨ビロードのコートを持って、まるで女神のように美しい。傍らのクラフトが「じつに粋だ」と眩く。うっとりするようなこの映像に、カルロスは思わず微笑んだ。それは生きたものもつ立体感、うねるような線、そして色合いをいきいきと表現していた。

カルロスが就寝したのは午前三時だった。シルクのカーテンの間に包まれて眠りに落ちるとすぐに、そよと吹く風さえない冬の美しい一日が、薔薇色に浸されてまた暮れ始めた。まだ明るさの残る、ホテルのどこかという特徴のない列柱廊が開く。黒人の召使いが、スコッチテリアを腕に抱いてこちらに戻ってくる。ジェノヴァ製の白い天鵝絨ビロードのコートを持った女がひとり通り過ぎてゆく。ところがその姿は人間の大きさを遥かに超え、オリンポスの山を登ってゆくユノのような大きさになって、雲の上を歩いている。エナメルを引いた靴の先が光り輝く青空のなかに踏み込み、後ろではスカートが風にはためく旗のようにぱたぱたと音を立てている。女はそのままいつまでも歩いてゆき…クラフトが「じつに粋だ」と言う。その後はすべてが混じり合い、ごちゃごちゃになっていったが、最後には空全体に広がったアレンカールだけが残り、仕立ての悪い丈長の黒いフロックコートで星辰の輝きを覆い隠すのだった。情熱の嵐に髭を揺らしながら、腕を持ち上げ、虚空のなかでこう叫びながら。

「春は来ぬ！ いざ身を寄すため、きみ」

〈第七章に続く〉

- (1) リスボン北東にある。  
 (2) 当時馬車の貸し出しを行っていた政府系独占企業。  
 (3) 宮殿の丘の北東にある、リスボン中心部の広場。  
 (4) かつてセーヌ河畔にあった塔。フランス王妃マルグリット・ド・ブルゴー

ニユが一三二二年頃から、夫の不在時に学生や騎士を連れ込み不貞をはたらくようになったと言われている。

(5) クラトは、アレンテージョ東部、ポルトレグレからおよそ二十キロ西の小さな町。十四世紀中ごろにマルタ騎士団のクラト修道院が建立された。

(6) ポルトにある通り。かつてポルトワインをイギリスに輸出する本拠地だった。ここでは、芸術精神と正反対の商人的メンタリティーのシンボルになっている。

(7) 「おれはメフィスト」の意。フランス語。

(8) ローダ・ブロートン（一八四〇年—一九二〇年）。イギリスの小説家。

(9) 「寝た後で」という意味のフランス語

(10) テージョ川に面したリスボン郊外の町。

(11) テージョ川に面した上流の町。リスボンとコインブラの間あたりに位置する。

(12) ポルトガル語では、「トマト」には「睾丸」という裏の意味がある。

(13) 一七六七年にリスボンに創設されたポルトガル王立工場の陶器はラート陶器として知られていた。

(14) マリア（あるいはマリアーノ）・フォルトゥニー（一八三八—一七四）。スペインの画家。ロマン主義から印象派への流れを方向付けた。

(15) 古本屋ロドリゲス・ガレロの店は別名「ロドリゲス・ド・ボンテ・ダス・アルマス」と言われていた。

(16) フランシスコ・ロドリゲス・ロボ（一五八〇年—一六二二年）。

(17) リスボンの古い民衆地区。

(18) ファド歌手と売春婦の境界はあいまいだった。

(19) 売春婦とファド歌手は当時、バイロ・アウト（「高い地区」の意）に集まり、混在していた。

(20) 四十二年に政権についたコスタ・カブラルはポルトガルの近代化を進めたが、「上からの近代化」に反発する民衆蜂起（マリア・ダ・フォンテの乱）が起き、四十六年にカブラルを罷免することで反乱を一時的に収束させた。  
 (21) 一六四〇年十二月一日は、ポルトガルが七十年に及ぶスペインの支配から

独立した日。

(22) スペイン人の蔑称としてガリシア人が使われる。

(23) 当時リスボンのバイシャ地区にあったパッセイオ・プープリコ(公共の散歩道)。一八八二年の市街地拡張によってリベルグード大通りが敷かれ、消滅した。

(24) アルカーダは現在コメルシオ広場として知られている。サン・ベントはストレラ地区にある国会議事堂をさす。

(25) グランド・カルトゥージオ会修道院で作られるリキュールの一種。

(26) リスボンの北およそ五十キロメートルにある町。

(27) ミーニョ県の都市。

(28) アレクサンドル・デュマ・ペールの戯曲『アントニー』(一八三二年)の主人公。

(29) アッシリアの将軍を殺して同胞を救ったユダヤの女傑。

(30) ペリシテ人の女性でサムソンの妻。サムソンを裏切って売り渡した。

(31) バイロンの詩劇『マンフレッド』(一八一七年)の主人公。愛する人を失うという悲痛な過去をもったロマン主義的な人物。

(32) モロッコのクサル・エル・ケビールにおける戦い(一五七八年)では、国王ドン・セバステイアン率いるポルトガル軍がイスラム教徒軍に大敗を喫した。そのさい、国王とともに、多くの貴族も戦死した。